

## 第4代中央気象台長

## 岡田武松事蹟 (I)

## 附略年譜

## 堀内剛二\*

## 1. 出生

岡田家の先はもと播磨の出と伝えるが、布佐転住の時代は詳かでない。徳川中期手賀沼開拓に功があって、今にその名を碑面にとどめるものがある。布佐浅間前桜井家裏に石塔一基が現存し、僧侶清水某以下6名の法、俗名を刻したなかに、岡田左衛門の名が見られる。歿年と覚しき年号は明暦、寛文などと読まれ、岡田左衛門のものが最も新しく宝永元年10月13日、法名は判読し難い。これによって、当時既に布佐に住し、岡田を称していたことが知られる。8代將軍吉宗の手賀沼開拓(享保7年)以前である。

岡田家は代々左衛門を襲いだ模様で、祖父、曾祖父とも左衛門であった。だが、過去帳その他検すべきものを欠いている。

祖父左衛門は、通称を安兵衛といい、呉服を営んで、江戸にまで店舗をかまえた。祖母ますは江戸神田の出である。

母ひさは左衛門長女で、弘化2年7月28日生。幼時を江戸で過したといい、安政2年11月の大地震にも江戸にあつて、後年その記憶を語った。江戸の店舗はその際に焼失した。ひさは生来記憶力強く、男まさりの性格で、武松の教育に関心したことは後に述べる。

父由之助は、茨城県信太郡木原村の出で、左衛門養子である。弘化元年4月17日生。従って母ひさに1年の年長である。家業を継ぎ呉服を営んだが、性理財に拘わらず、この頃より岡田家の家産やや傾き、漸く衰運に赴いた。一家の衰運が時に英才を生むことはよく見られるところである。時代は、また、明治への激動期に際していた。

岡田武松は、父由之助母ひさの2男として、明治7年8月17日、千葉県東葛飾郡布佐町布佐2455番地に生れた。正しくは武松に作り、後昭和16年10月2日附で武松と改めた。ここでは繁を避けて武松とする。武松の名は水滸伝の武松より取ったという。

兄弟姉妹すべて3男5女で、金太郎、やす、とく、武松、せい、長次郎、みつ、つね、である。武松は長男金太郎より8才年少、3男長次郎に5才の年長である。末子つねが20

才未満で死亡した以外は、むしろ長寿の傾向である。

長男金太郎は、明治16年12月父由之助隠居と共に家督相続し、商を営んで播磨屋を号した。後群司の父となる。

その生地布佐は関東平野にあって大利根に望む悠大な地勢をふまえ、もと利根川、霞浦、手賀沼を結ぶ水運の要衝に当り、物資を集散して栄えた。<sup>(1)</sup> 武松はこの風土環境のうちに幼時を過した。のみならず、また、生涯ここを離れなかったといっている。

明治維新後も、各地に士族の叛乱、農民の騒擾が断えず、世情騒然としていたが、文明開化の波は新都東京より徐々に地方に打寄せた。武松の生年明治7年には、既に荒井郁之助は開拓使出仕となり、正戸豹之助は地理局にあった。中村精男、和田雄治は開講された開成学校仏語物理学科に正に入ろうとしていた。明治8年以降利根川治水の大計画は、蘭人技師長ファン・ドールンその他によって始められている。

## 2. 修学時代

武松は幼少時を出生地布佐で育った。東都には姻戚あり、商取引先に日本橋小野、神田麴恋坂清水、京橋近江屋など姻戚同様の交誼をなすものがあつた由で、屢々往来もあつたであろう。寺田博士<sup>(2)</sup>の指摘した「測候瑣談」に見える江戸文学調は、或はその一因をここに見うるかも知れない。

明治14年(推定)、武松は数え年8才で布佐の小学校へ入った。小学校はもと寺小屋勝蔵院にあって、初等、中等、上等とあり、それぞれ3、3、2年、計8年の課程であった。同級生金子徳太郎氏<sup>(3)</sup>の談によると、当時修身、珠算、地理などの学科を修め、級友約20名程度であった。武松は健脚で、いたづらでなく、人を服さしめる所があつた。珠算に長ずること驚くべく、到底及ぶところでなかった、という。

武松は、また、通学の傍課外に数学を学んだ。その師は当時布佐在住の和算家篠崎博文である。晩年武松は師

(1) 利根川図誌

(2) 寺田寅彦全集。18巻、44頁

(3) 布佐の旅館中野屋老主、武松の2年長で84才現存

\* 気象庁研修所

の小伝<sup>(1)</sup>を撰して、自ら門人と称した。

「篠崎博文先生ハ文政九年下総国平戸村ニ生ル土屋久左衛門ノ二男ナリ先生幼ニシテ穎悟特ニ計算ノ技ニ巧ナリ長シテ算数ノ学ヲ修メ壯年ノ頃弘ク良師ヲ訪ネテ房総ノ間ニ遍歴シ途次布佐村ニ止マリ篠崎家ニ入居シ甚之丞ヲ襲名シ帷ヲ下シ郷党ニ教授ス明治二八年二月二十一日病ヲ以テ歿ス享年七十才先生本朝数ノ盛衰ヲ究メ著書數卷アリ先生マタ和歌ヲ好クシ詠草數冊アリ不幸ニシテ火災ノ為共ニ灰燼ニ帰ス

昭和二十八年十二月 日

門人 理博岡田武松撰」

また、勝蔵院の小学校には金井先生があったが、名のみ伝えられている。

これらの師によって、幼にして武松は、同郷佐原の先学伊能忠敬の事蹟を教えられたであろうことは推測に難くない。

上記金子氏によれば、武松は勝蔵院の小学校を上等まで卒えたというから、明治22年まで布佐にあったことになる。続いて、日比谷の東京府尋常中学校に入り、25年4月6日にこれを卒え、更に、本郷追分の第1高等中学校(後の第一高等学校)に進んだ、当時中学は尋常3年、高等3年の制であったが、規定通りの尋常中学校は殆んどなく、学制も続いて変り、この東都遊学の年次には疑がある。

武松の進学は、もとより、学業の抜群に依ったものであろう。だが、母ひさの進取的な気象も与って力があつたと云われる。金太郎を進学させようとして長男の故に止められたひさは、武松を思うまま東都へ送った。

武松は東都の親戚から日比谷の尋常中学校へ通ったが、止宿先は詳でない。長期休暇や休日には徒歩で布佐に戻った。そうしたある日、武松は旧友金子徳太郎を誘い筑波まで往復もした。

第1高等中学校では、寮生活を送った。

当時武松が、時代と教育にどのように影響され、どんな事柄に関心を持ったかは、遺憾ながら後日根本資料の整理に俟たねば知り得ない。ただ、明治25、6年の高等中学時代、20才未滿で既に生涯の目標を決定していたことが注目される。片山博士<sup>(2)</sup>によれば「岡田君は寄宿舎に入ったころ、すなわち十代の年頃から、すでに将来気象学をやるときめておりました。それには彼の同郷の人伊能忠敬をはやくから崇拜しておったからでしょう」当時寄宿舎で出した雑誌にも気象のことを記している由、運動はせず「ニヤニヤしては皮肉などとはいう人」で、恐らくその旺盛な読書慾ははやく所謂雑学にまで及びつたものではあるまいか。綽名は海坊主。色黒く肥じし、眼光人を射る後年の風采を思わせるものがある。

片山正夫は寄宿舎の同室であり、同級には桑木或雄があった。理科農科志望で本科に進んだ級では、真島利行、柴田桂太、早乙女清房、麻生慶次郎、服部広太郎、など

(1) 篠崎家蔵

(2) 片山正夫、科学 26 卷、10 号、540 頁、1956

がある。

武松は、天皇東北行幸(14年)、加波山事件と秩父暴動(17年)を布佐で知り、濃尾大地震(24年)と日清戦役(27年)には東都にあった。この間、通称東京気象台は観測網を持って暴風警報(16年)を開始し、気象台測候所条例発布(20年)で中央気象台となり、日清戦後(28)年内務省地理局より文部省移管に至っている。台長また荒井郁之助、小林一知を経て中村精男となった。

明治15年5月3日正戸豹之助の主唱で発足した東京気象学会も、明治21年5月28日大日本気象学会として再出発、会員300余名に達していた。気象学文献に北尾次郎の颯風論(20年)中村精男の大日本風土編(26年)があり、観測には群司大尉の千島気象調査、野中至の富士山頂気象調査(28年)が見られた。

武松は、明治29年7月7日第1高等中学校を卒えた。続いて、東京帝国大学理科大学に入り、明治32年7月10日物理学科の業を卒えた。山川健次郎、田中館愛橘、藤沢利喜太郎、寺尾寿、長岡半太郎などが大学での師であり、中村清二は高等中学校での師であった。32年9月、熊本で夏目金之助、田丸卓郎に学んだ寺田寅彦が入れかわり理科大学に入った。

武松は大学在学中に本多光太郎、日下部四郎太を知った。また、郷里布佐町には松岡操が転籍して、その四男柳田国男と知った。31年11月14日、兄金太郎妻さんは長男群司を生んだ。

武松の東都遊学は、岡田家にとって、過重の時期も無くは無かった。しかしながら、日清戦役後国運の上昇期に、かくてその修業を終えた。武松は、同郷の師伊能忠敬の素朴着実と鞏固な意志を以て、いま実社会に歩を進める。時に年齒26であった。

### 3. 中央気象台奉職

明治32年7月22日、岡田武松は、宿志によって気象学を生涯の職とすべく、中央気象台予報課に入った。最初の辞令は任中央気象台技手3級俸給与の文部辞令、翌33年7月31日同2級俸給与となった。

当時官制によれば、技師は専任4名で、技手15名、書記4名。技師は台長中村精男、予報課長和田雄治、観測課長正戸豹之助、統計課長大石和二郎であった。馬場信倫は東京商船学校教諭本台技師兼任で、予報課に席を置いた。大石和二郎は明治32年2月の奉職で、武松に先んずること僅かに5箇月。偶々33年7月19日の官制改正により技師技手書記各1名の増となり、奉職1年半で任官し、統計課長となった。武松の高等官任官は後に述べる通り6年後の明治37年8月である。これが理学士武松の胸中に後年の官僚主義に対する嫌悪を育てたのかも知れない。武松は愈々研學に精進した。

予報課の同僚に、東京気象台以来の馬場信倫、井口竜太郎、また才人六笠弘躬、中川源三郎などがあつた。中川源三郎は32年7月「農業気象学」を著し、翌33年同じく中川源三郎「天気予報論」(8月)馬場信倫「気象学」

(9月)が刊行される。若き武松は、彼等とともに、慣れぬ天気図を引き、また高低気圧の進路を描いた。多分、同僚の経験主義に對し嫌らないものがあつたでもあろう。

日清戦役後の気象界は観測網の拡大で特徴づけられる。たとえば、明治29年3月の台湾総督府測候所官制公布である。ここで技術者の教育が問題となり、明治30年6月第4回気象協議会に「測候技手を養成する方法」が諮問された。

「近来気象事業の発達に従ひ大に測候技手の不足を感じ故に之を養成する方法を講ぜざれば到底世の需用に應ずること能はざるなり」<sup>(1)</sup>

武松自身も記している、<sup>(2)</sup>

「明治32、3年頃まで測候所に勤務せられていた方は、元内務省の測量係に居られた方々が所長であり、若手の方々も色々の縁故で斯業に入られたのであり、人物としては確した方々であつたが気象学や地震学の専門知識はどちらかと云へば持合せが少ない。(略)そこで当時の予報課長であつた和田雄治先生が主唱となり、大石氏や老生が参加して気象観測練習会というのを作つて各測候所から希望者を募集して授業を開始した」かくて「気象観測練習会規則」がなり、明治33年5月20日より同11月19日まで、その第1回練習会を行った。会員数16名、学科は気象、地震、物理、実科は観測法、器機用法、調査法、その他実地の研究<sup>(3)</sup>である。気象学の担当は岡田武松であつた。第2回は翌34年9月6日より12月20日まで、全員28名、この回には1箇月半の予修科を設けた。第3回は明治35年4月11日より同7月25日まで18名が業を卒えている。

武松は、この頃また、最初の著書である「近世気象学」を公にした。博文館蔵版、帝国百科全書の第73編、明治34年10月刊、である。緒言に、

「この書は気象学の一斑を知らんと欲する人の階梯に供せんが為に編纂せしものなり(中略)本書を編するに當りては主として仏国アンゴア氏の初等気象学及び那威国モーン氏の気象学綱要を参照しまた澳國の碩学ハン先生の名著気候学に負うところ多し」

即ち、当用のため邦文気象書を編したもので、凡例に、

「天気予報の如きは特に重要な事項なりと雖も元と斯学の应用到に属するが故に其方法の如きは全く論及せずこれ一つは編者の如き若輩の及ばざるところなればなり」とあるのが注目される。

「近世気象学」をはじめとし、武松はその生涯に多くの気象学書を執筆することとなる次第は後にも述べるが、これは必ずしもその奉職が技術者教育を要する時機に際していたことのみによるものではない。気象事業の運営に教育の意味するところを既に洞察していたのであろう。

(1) 第4回気象協議会議事録

(2) 岡田武松、研修時報創立30年記念特集

(3) 気象集誌、明治34年

「折角北尾先生がスタートを切つて下さつたが悲しいことには後統部隊がない。是は學問として気象学を研究しようとする青年に乏しかつたのが主因であるが、一つは入門書が欠けていた為と思う。気象学と云うのは一体どんなものかを示す書物がなかつたのが抑々の原因であらう」<sup>(4)</sup>

因みに、この博文館帝国百科全書には、級友真島利行の「無機化学」、また高木貞治の名著「新撰算術」が見える。

明治34年4月1日、地方測候所職員待遇法施行で測候所技師の制が出来た。また、測候所奉職の技手は、陸軍服役条例第164条により予備後備役に在る者の召集免除法を受けることとなつた。<sup>(2)</sup>一方、地方経済逼迫で測候所費が切りつめられ、測器の補充も充分でなく、国庫補助の要望が現われつつあつた。

この明治34年は中央気象台の創立25周年に當つていた。台長中村精男は気象事業の発展を記念し、同年3月4~11日開催の第5回気象協議会に天皇の臨幸を仰ぎたい旨文部大臣松田正久に諮つたが、内外多端の折柄成らなかつた。武松はこの協議会の最終日に「雲の發生に就き」講演した。

気象集誌に現われた最初の論説は「東京に於ける雲量の一日間変化」(32年12月)、次いで「東亜に於けるフェン風の發生地」(33年7月)。やがて諸種の雑誌に、初期の研究題目である地中温度、雪の熱伝導度、フェン風、などに関する報文が現われる。<sup>(3)</sup>

この頃、気象台では夏季富士山頂気象観測が引続き行われていたが、武松も井口竜太郎、野田為太郎、佐木虎士などと数次に亘つて参加した。

武松は、また、酒を嗜んだ。奉職後間もない頃の忘年会の景況は統測候瑣談「高山山」に見え、和田雄治の石堂丸、馬場信倫の刈萱で大喜利の幕が下りたという。酒友は和田雄治、後に佐藤順一など、時に大酔して門番吉田孫兵衛を煩わした。

明治34年は、武松にとって、違つた意味で重要な年となつた。この年の10月25日、武松は茨城県北相馬郡布川町457番地海老原精一長女みつと婚姻、同日入籍して家庭を持った。海老原家は布川の旧家であり、仲人は湖北在住の中野治四郎<sup>(4)</sup>であつた。

武松は、その頃、旧本丸の西洋館と呼ばれる官舎にいた<sup>(5)</sup>。この建物は往昔暴風警報創始の頃(明治15年)雇人E・クニッピングの居住として建られたもので、<sup>(6)</sup>後これを改造して独身者が住まつたものであつた。独身の武松は、押入に洗濯物を放込み、またしても綺麗そう

(1) 岡田武松、測候瑣談、邦文の気象学書

(2) 明治34年1月9日文部大臣通達

(3) 小堀磐雄、故岡田武松先生著作目録、気象庁図書月報第2巻11号

(4) 現気象庁海洋気象部海務課長中野健吾氏の父

(5) 明治33年刊中央気象台一覽附図参照

(6) 堀内剛二、本邦暴風警報創業始末(3)、測候時報21巻11号

なのを引出して身につけたりし乍ら、勉学にいそしんだ。みつとの結婚生活はこの「西洋館」に始まったが、その名に似ない西洋館であった。判任官2等の月俸は45円以上60円未満で、当時米価は石12円余であった。

日清戦後は、天気予報に対する関心が漸く高まって来た時期で、これが海外気象電報の入手を喫緊事とした。明治30年中村精男は朝鮮に、同年和田雄治は上海、厦門、香港に、31年正戸豹之助は元山、浦塩へ、同年和田雄治は再び清、韓国へ、33年和田雄治はマニラ、香港へ、34年馬場信倫は清国へ、それぞれ気象事業視察と気象電報交換協議のため赴いているのが見られる。明治36年1月天気予報暴風警報規則改定によって、従来の7気象区を10気象区に改め、また予報発布は全国が午後4時、地方が6時過であったのを午前6時の天気図によって全国は9時、地方は11時までに予報を発し、午後要すれば追報することとした。下って明治41年文部省令第12号気象台測候所条例施行細則改正及中央気象台告示第128号天気予報暴風警報規程によって、地方測候所に地方天気予報暴風警報の発布を許すに至る。

中央気象台が、気象学乃至地球物理学の分野に於ける調査研究に積極的に向い始めたのも、この明治30年代の中期である。これを主唱したものは和田雄治であったが、<sup>(1)</sup> 事実上推進したのは岡田武松であった。中央気象台欧文報告の発刊は明治37年6月、これは武松の進言に依るもので、編輯には自ら当った。<sup>(2)</sup> 第1号は武松のEvaporation in Japan 外1編他に和田、大石の各1編であった。同第2号(明治42年3月)はその論文すべて5編、何れも武松の執筆である。<sup>(3)</sup>

気象協議会に地方職員の調査報告が見られるのも明治36年(第6回)に始まる。気象集誌もまた明治36年1月より体裁を改め「弘く内外の学者に論文の寄送を請い漸次英仏独語の原文を以て之を掲載し<sup>(4)</sup>」ようとして、裏表紙に欧文目次を附した。更に、この年の第16回総会は理科大学中央講堂で開催し、長岡半太郎、三好学の特別講演を行っているのが見られる。前年以來学会幹事となった武松が、36年5月幹事編集委員の双方を辞して、後任大石和三郎となるのは、或は急進に過ぎたのでもあろうか。気象集誌の欧文論文は明治37年8月武松の地中海中温度に関するものがその始めである。

明治37年2月2日、妻みつは長女易(カネ)を生んだ、長女出生4日後の2月6日、日露の国交は断絶した。中央気象台一覧の沿革より関係事項を摘記すると:一「明治37年1月朝鮮並ニ清国ニ於ケル気象ノ調査頗ル急務トナリタルヲ以テ直チニ其方法ニ着手ス2月27日ヨリ其筋ノ請求ニ応シ広島、下関ノ2測候所及佐世保鎮守府測器庫へ気象報告ヲ為シ宇品碇泊場司令部及宇品碇泊場司令部門司出張所等へ天気模様ヲ通報セシム3月5日勅令第60号ヲ以テ中央気象台ニ臨時観測所ヲ設ケ臨時観測技手15名ヲ置カレ3月7日第1乃至第5臨

時観測所ノ位置ヲ指定セラレタリ即チ朝鮮釜山、木浦附近、仁川、竜岩浦、元山はナリ3月臨時観測所事務処理ノ為メ臨時観測課ヲ置ク3月25日第2、同26日第1、4月6日第3、同10日第5、5月1日第4、各臨時観測所ノ事務ヲ開始ス7月28日勅令第188号ヲ以テ臨時観測ニ従事スヘキ職員ヲ技師1人技手43人書記2人トシ且滿洲並ニ清国方面へ臨時観測技手ヲ派遣シテ気象観測ヲ為シ得ルコトニ改正セラル8月5日第6及第7臨時観測所位置指定アリ第6は清国盛京省青泥窪ニ第7ハ同營口ニ置カレ第6ハ9月11日第7ハ同30日事務ヲ開始ス9月中学校卒業ノモノヲ募集シ臨時観測技手候補者19名ヲ養成ス同月13日清国芝罘同19日清国天津10月6日清国杭州同12日清国南京へ夫々臨時観測技手ヲ派遣シテ気象観測ヲ開始ス10月25日第2臨時観測所同26日第3臨時観測所庁舎建築落成ス

「明治38年1月7日清国漢口同18日同沙市ニ於ケル気象観測ヲ開始ス4月6日第8及第9臨時観測所位置指定アリ第8ハ清国奉天省奉天ニ第9ハ韓国成鏡北道城津ニ置カレ第8ハ5月1日ヨリ第9ハ同11日ヨリ事務ヲ開始ス5月26日第6臨時観測所出張所ヲ清国盛京省旅順ニ設置ス6月臨時観測技手候補者5名ヲ募集養成ス7月19日第6臨時観測所出張所事務ヲ開始ス9月19日第10臨時観測所位置ヲ樺太九春古丹ニ指定セラレ10月10日其事務ヲ開始ス12月5日芝罘観測所庁舎建築落成ス12月25日臨時観測技手候補者4名ヲ募集養成ス12月30日第1臨時観測所庁舎建築落成ス」

日露講和条約の調印は周知の通り28年9月5日である。

上記37年3月の臨時観測課設置に際し、和田雄治がその課長を兼ねた。続いて、勅令第188号により技師定員の認められるや、和田は仁川測候所長となって転出し、海外臨時観測所の設置に奔走した。かくて武松は、明治37年8月22日附を以て、和田雄治の後を襲い、任中央気象台技師叙高等官7等、予報課長兼臨時観測課長となった。同10月21日從7位に叙せられ、11月30日9級俸下賜である。

明治37、8年の日露戦役時予報業務の責任者となった武松は、従って、38年5月27日日本海々戦時の予報にも関わった。「天気晴朗なれども波高し」「26日朝九州近海にあった748耗の低気圧は南海道沖を東行して、27日朝には鹿島灘に達した。従って26日朝は遼東半島は勿論朝鮮、西日本、中部日本に亘って雨が降り、低気圧が更に東に進むにつれて雨域は東に移動し、27日朝は北海道と奥羽とが雨になり、和田雄治の後を襲い、任中央気象台技師叙高等官7等、予報課長兼臨時観測課長となった。同10月21日從7位に叙せられ、11月30日9級俸下賜である。

明治39年3月15日叙高等官6等、同4月1日日露戦役の功に依り勳6等単光旭日章及金300円を賜い、同5月30日叙正7位となった。足掛6年にして任官した武松の履曆書は、ここに漸次昇進を記しはじめる。しかしながら、既にして大志を抱いた武松は、も早やその故に歩みを緩めることはなかった。

中川源三郎は明治34年末神戸測候所長、馬場信倫は35年商船学校教授専任となり、六笠弘躬もまた37年3月第3臨時観測所(仁川)に赴任していた。〔未完〕

(1) 気象集誌、明治34年7号、気象協議会についての所感

(2) 岡田武松、測候瑣談、和田雄治先生の偉績

(3) 小堀、同上

(4) 気象集誌、明治36年1月、本誌体裁の変更

(1) 荒川秀俊、戦争と気象